カチナドールの変遷

金子　明代
（手塚恵子ゼミ）

目次

序章　はじめに
１章　ホピ族について
1-1 移動と出自
1-2 部族の構成
1-3 生活と信仰
1-4 伝統的な宗教
1-5 異教への改宗と伝統宗教の回帰
２章　カチナドールの変遷
2-1 儀礼と祭祀
2-2 アメリカ南西部の鉄道開通による伝統工芸品への影響
2-3 カチナドールのスタイルの変遷
３章　制作者の意識の変容
3-1 ホピ族における男女の役割
3-2 制作者の暮らしとスタイルの傾向
終章　おわりに

序章　はじめに

ホピ族は北アメリカ大陸のアリゾナ州北部に住むプエブロインディアンである。プエブロとはスペイン語で「村」という意味である。彼らの家は土と藁を固めた日乾レンガで造られており、この様式に住む人々を総称してプエブロインディアンと呼ぶ。13 世紀～ 14 世紀ごろ移動し、現在はフォーコーナーズと呼ばれるアリゾナ州、ニューメキシコ州、ユタ州、コロラド州の境界あたりで定住している。ホピ族の居住地は 10360 平方 km で、64750 平方 km に及ぶナバホ族の居住地に囲まれており、砂漠地帯にそびえる高さ 180 m の３つのメサと呼ばれる高台に村があり、約 11000 人が住居を構え生活している。

現在、ホピ族の他にズニ、タオス、アコマ、タオスなど約 25 部族のプエブロがニューメキシコ州北西、アリゾナ州北東、南東のウタ州、一体に広がっている（図１）。どこも標高が高く不毛な土地で、年間を通して水不足の土地であるため、共通して雨乞いの儀式が行われている。プエブロインディアンが行う儀式はその多くが部族内のみで行われており、観光客や部族以外には非公開とされているため、儀式の詳細は十分に理解されていない。ホピ族の儀式は大きくわけて大衆向けに公開されている催しと部族内のみの儀式と２種類あるが、いずれも写真撮影、スケッチ、録音などの記録は原則禁止されている。儀式については [2-1 儀礼と祭祀] で述べる。

図１　プエブロインディアン居住地

ホピ族の社会

ホピの村は３つのメサで構成されている。第一メサにはハノ、ワルピ、シチョモビ、テワ、ポラッカ、第二メサにはショングポビ、ミショングノビ、シパウロビ、第三メサにはホテビラ、キョコツモヴィ、モエンコピ、バカビ、オライビの村がある。「ホピ族はアメリカ大陸最古の住人を自認している。オライビなどの村は合衆国における最古の現存する入植地であることに疑問の余地はない。」[ウォーターズ 1993 年:11 頁] とあるように、

オライビはホピの中でも最も古い村である。

このようにホピには13の村があるが、大きくわけて３つに分類することができる。進歩派、伝統派、中立派である。進歩派の村はバカビ、キョコツモヴィ、シパウロビ、モエンコピ、伝統派はオライビ、ホテヴィラ、ションゴポヴィ、ミショグノヴィ、中立派はワルピ、シチョモヴィ、ハノ、ポラッカの第一メサの村々である。進歩派はホピ部族議会を支持する村である。19世紀はじめ、「インディアン再組織法」の成立によってホピから代議員が選出され、ホピ部族議会が設置された。部族議会は近代化を推進するため、伝統派の村々からは支持されていない。伝統派であるオライビの村は、進歩派が行うホピ部族会議には協力しない。またホテヴィラは未だに電気や水道を引くことを拒み、伝統的な暮らしをしているが、ホテヴィラのような強硬な伝統派内で、便利な生活を求める若い世代を中心として分裂が深まっている。中立派は会議には参加するが会議での決定に対して自由な態度が認められている。

１章　ホピ族について

１－１　移動と出自

ホピはこれまで長い間移動の旅を続け、約4500年現在の場所で定住している。ホピの出自はその言語からユト・アステカ語族の一派のショショーニ語に由来するため、マヤ・アステカ文明と深い関わりがある。ホピ族の神話とアステカ族の神話を比較すると、似通った点がある。ホピの言語がアステカ語族の一派であるように、ホピの神話もアステカ神話に由来するものであると思われる。

アステカの神話では、現在の世界の前に４つの太陽の時代があり、それぞれが滅び、現在は第５の太陽の時代であるという内容である。

アステカの主要な神はケツァルコアトルとテスカトリポカである。この神々は原初神オメテオトルの息子であり、兄弟である。ケツァルコアトルは創造と豊穣の神、テスカトリポカは破壊の神である。

〈アステカの神話（一部省略）〉

神話によれば、原初神オメテオトルが４人の息子を生んだ。一番上が赤いテスカトリポカ、２番目が黒いテスカトリポカ、３番目がケツァルコアトル、４番目はアステカの守護神ウィツィロポリトリ。２番目の神が、悪魔的な存在のテスカトリポカである。この４人の神が主体となって後の太陽の時代を治めていく。

最初の世界である第一の土の太陽の時代は、これら４人の神の協力で造られた。神々は火、天、地を造った。次に地上に住まう１組の男女、を造った。（人間の創造について続きの神話があるが、ここではホピ族と共通する部分を紹介するため、省かせていただく。）

最初の世界は黒のテスカトリポカが支配していたが、ケツァルコアトルがテスカトリポカを攻撃し、テスカトリポカは海に落ち、復活したときにはジャガーになっていた。地上にはジャガーの群が出現し、巨人たちを滅ぼし、第１の土の太陽の時代は終わった。

第２番目の風の太陽の時代、ケツァルコアトルが統治者となった。しかしテスカトリポカがケツァルコアトルを攻撃したのでケツァルコアトルと地上の人間は風に吹き飛ばされた。人間たちはみな猿になってしまった。

第３番目の雨の太陽の時代、雨の神が統治した。この時代はケツァルコアトルが火の雨を降らせ、それによって世界は滅びてしまった。

第４番目の水の太陽の時代はチャルチウトリケェが統治した。チャルチウトリケェは雨の神の妻である。この世界は大洪水で滅ぼされた。この洪水によって、世界の山は崩れ、空はなくなり、人間たちは魚になった。

これらの４つの時代が終わり、現在の時代、第５番目の太陽の時代が造られた。この時代はケツァルコアトルとテスカトリポカも協力し、新しい人間をつくり世界を１から造り直し、新しい第５の太陽を造った。この太陽は少しも動かなかったため、テオティワカンをはじめ、他の神々も自らの体を犠牲とし、太陽に身を投げたことで動き始めた。

ホピの神話も、アステカの神話と同じくこれまで第１の世界から第４の世界があり、それぞれ洪水等の要因で創造と滅亡を繰り返し、現在は第４の世界であるとされている。

〈ホピ族の神話〉（一部省略）

第一の世界はトクペラといい、創造主のみが存在した。創造主は絶対神ソツクナングを創造した。ソツクナングは、太陽や月、地球、９つの宇宙を創った。次にコクヤングティを創造して、地球に配置させ、コクヤングティは双子の神を産んだ。ポカングホヤとパロンガウホである。それぞれポカングホヤを北極、パロンガウホを南極へ向かうよう指示し、地球の自転を支配させた。

次にコクヤングティは赤、黄、白、黒色の男を造り、また赤、黄、白、黒色の女を創った。８人は動物たちと共存して、素朴な暮らしを続け、子供ができ、人口はますます増えていった。しかし人口が増えるにつれ、神を忘れる人間が現われた。

この様子を見たソツクナングは、第一世界からトクペラを滅ぼすことを決意し、正しい道を歩む数人の人間を残して、彼らをアリ人間と共に地下に避難させた。

その後、ソツクナングは火の雨を降らせ、地上を全て焼いて浄化した。同じく第２の世界、第３の世界も人々が怠け、正しい生き方をしなくなった為、ソツクナングは第２の世界の時に地軸を乱して天変地異を起こし、第３の世界は大洪水によって、一握りの正しい人間以外を滅ぼした。現在の第４の世界は、ツワカキといった「完全なる世界」である。第３の世界から大洪水を逃れた正しい人間が出た場所は、高い山の頂だった。人々は鳥を使って、乾いた地面が現われたことを確認すると、葦で船を作り、島から島へ渡り、最後に巨大な大陸にたどり着いた。すると、そこに絶対神マサウが姿を現した。マサウは第４世界の支配者である。マサウは大陸へやって来た人々を取りまとめると、集団ごとに移動せよと命じる。それぞれが定住の地を見つけるまで進み続け、大陸の端に至ったら、今度は曲がれと伝えた。現在、ホピ族が住んでいるアメリカ南西部を中心として、人々は四方に移動した。

それぞれが海岸まで達すると、進行方向に向かって右に曲がったものと、反対に左に曲がったものがいた。全体から見ると、それは巨大な卍を描いていることになる。実は、このとき絶対神マサウは、人々に向かって「星に従って進め。星が止まったところが定住の地である」と伝えた。

また第４の世界が終わる時、マサウはホピの生き別れた兄弟、「白い兄」に再会し、共に正しい生き方を学び直す日がやってくるという言い伝えを残した。16 世紀のスペイン入植の際、外国人をこの白い兄の再来と認識してしまい、ホピ族は後に間違いであったと気づく。またアステカ神話でも同様の結末を迎える。アステカ神話のケツァコアトルは「羽根の生えた白い蛇」であり、テスカトリポカとの争いに敗れたケツァルコアトルは「セーアカトル（一の葦の年）に復活する」と宣言してアステカを立ち去った。そして、一年の葦の年である 1519 年にメキシコ人が侵入した際、アステカの人々はケツァルコアトルの再来と認識し、丁重にもてなした。メキシコ人はアステカを滅ぼすための視察であったと気づくのに時間がかかってしまい、対応を遅らせたといわれている。

ポーラアンダーウッドによると、「アメリカ大陸に住むインディアンと呼ばれるネイティブアメリカンの人々は、その昔ベーリング海峡が陸続きだった頃、すなわちベーリング陸橋を渡り、アジア大陸からアメリカ大陸へやってきたモンゴロイドの子孫だという説が定着しつつある。」とあり、ネイティブアメリカンはベーリング海峡を通って北方から現在の場所まで移動してきたということになる。しかしホピ族の伝承によると、彼らの出現の場所は南方であり、北上して現在の場所に辿り着いたとあるため、南下説とは一致しない。ホピ族の持つ移動の物語を人類学的な説に当てはめることはきわめて困難である。

１－２　部族の構成

ホピ族は母系出自集団であり、母方居住婚の体系をとっている。ホピ族の家庭でこどもが生まれると、生まれたこどもが女性であった場合は、特に喜ばれる。家を所有するのは女性であり、それを継承する権利は女性に与えられるため、女性がいなくては家族の財産である家が途絶えてしまう。そういった点でホピ族は女性優位な社会に思われるが、両性に共通した父方・母方に対する態度の在り方が定められている。その態度の在り方として、男の場合は母方の女性は非冗談関係であり、おじに当たる人物には躾の権利がある。

一方父方の男性、女性はともに冗談関係であり、親しい間柄となる。自己が女の場合は逆転する。

ホピ族にとって、特に男性の場合は家族よりも部族の集団が重要である。各部族は１～４つほどの支族から成り立っている。それぞれがホピの年間を通して行われる儀式の際に決まった役割をもっている。部族の名前はオウム、ワシ、熊などの生き物の名前であったり、また水、火といったホピ族の持つ神話や伝承、生き方に関連するものである。以下の通りである。

・熊族　（支族：黒熊、灰色黒、皮ひも、ツグミ、モグラ）
・オウム族（支族：カラス、ウサギ、タバコ）
・ワシ族（支族：太陽、額）
・穴熊族（支族：蝶、カチナ）
・クモ族（支族：灰笛）
・火族（支族：青笛）
・蛇族（支族：砂、トカゲ）
・水族（支族：深井戸、浅井戸）
・カボチャ族（支族：青サギ、タカ）
・弓族（支族：矢、アカザ、大葦、小葦）
・黒種族
・コヨーテ族

こういった各部族の中でも、熊族、オウム族、ワシ族、穴熊族が最も重要な部族である。その中でも熊族は特別で、ホピの指導部族である。「ある部族の地位とその所有地の相対的な価値は、四方位への移動をどの程度成功させたか、またどのような儀式を所有しているかといった宗教的な基盤にかかっている。」［ウォーターズ 1993 年：162 頁］とあるように、各部族がかつて行ってきた事柄に基づいて地位が決まるため、神話や伝承に着目し、どの部族がどんな儀式を行っているか知ることができれば、各部族の生い立ちや役目が理解できる。

１－３　生活と信仰　ホピ族の生活

ホピ族の生活を支えているのは農業である。現金収入の少ないホピの就労者が固定給を得られる機会はほぼトライバル政府による雇用で、それ以外の非登録自営業として美術工芸品の販売があり、ホピとズニの成人男女の７割以上は失業状態にある。［伊藤 2008 年：99 頁］ホピの伝統的な生業は農耕であり、主に耐乾性の強いトウモロコシ、豆、カボチャ、茶などを栽培して自給自足の生活をしている。主食はピキブレッドと呼ばれる、トウモロコシを乾燥させて粉状にし、水で練り固めたものである。これをクレープのように薄く伸ばし、焼き上げる。ホピ族にとってトウモロコシは作物の中でも特に神聖視しており、大切に扱っている。カチナセレモニーといった部族全体で行う儀式や人生のあらゆる節目の時期にはトウモロコシがかかせない。

その一例として、子供が生まれた日が挙げられる。「子が生まれると、母なるトウモロコシが脇に 20 日間置かれ、その間、子は暗がりの中で過ごす。それは、体はこの世のものであっても、なお宇宙の両親の保護の下にあるからである。子供が夜間に生まれると、翌朝早くに四つの壁と天井に、コーンミールで四本の線が描かれた。線は、仮の家と霊の家の両方が地上で彼のために備えられたことを表す。一日目に、子は杉を煎じた水で体を洗われる。良質の白いコーンが全身にすり込まれ、まる一日そのままにされる。翌日、体を洗い、杉の灰をすり込む。これが三日間繰り返される。５日目から 20 日目までの間、体を洗いコーンミールをすり込むのに一日、灰をすり込むのに４日かける。」［ウォーターズ 1993 年：31 - 32 頁］

このようにホピでは子供がうまれた際に、コーンミールと呼ばれるふるいにかけていないトウモロコシの粉を体にすり込むといった行為を始めとして、ホピのライフヒストリーにおける様々な活動にはトウモロコシが付きものである。

ホピ居住地内にはコンビニ、スーパー、レストラン等の店は無いため、ホピの進歩派よりの人々はホピ効外の町まで生活必需品を購入しに行く。また年間降水量は約 300 ｍｍの半砂漠気候であるため、人々は生活に必要な作物の豊穣と降雨を祈る儀式を行っている。現在も、ホピ族は伝統的な儀式や催しを行ってはいるが、暮らし方に関してはメサの麓とメサ内では少し異なった生活をしている。メサの麓は電気や水道が通っている村が見つかるが、伝統派の村のメサには無く、井戸まで水を組みに行っている。しかし生活の近代化に伴って、昔ながらの生活サイクルを維持している伝統派であっても、中には電気や水道を設けたいと思っている人もいる為、今後はメサ内に水道管や電気の増設といった近代化に即した生活を実現

する可能性があると思われる。

1－4　伝統的な宗教

ホピ族の信仰の対象はカチナと呼ばれる精霊である。カチナ（katsina）は毎年、冬至から夏至の間にサンフランシスコピークスという山から下りてきて、半年間ホピの村に滞在するといわれている。カチナは目には見えず、神聖な存在として認識されている。その数は約400柱以上あるとされ、カチナに宿るスピリットはじつにさまざまである。ホピ族の人々は自分たちの祖先が宿ると考えている。カチナ自身が名前をもった単体の神であることが多いのだが、カチナ信仰を持つ他のプエブロインデイアンは、自然現象や、歴史上の人物や、夢に現れた生き物が宿ると考える部族もある。このようにさまざまなカチナが存在するが、ホピ族が行う儀礼はこのカチナから教えられたものとされる。ホピ族は大昔にカチナから教わった指示に従って、年間を通して儀式を行っている。

〈ホピ族に伝わる言い伝え〉

昔、干ばつと飢餓が何年もの間続き、飢えと渇きで人々が死に始めた。カチナはこの苦しむ人々を見て哀れみ、カチナ達は人々のために食物を育て雨を呼び、歌と踊りの祈りを通して病を治すため自分たちの姿を見せると決心し、人間的な形に姿を変えた。人々はこれまでカチナを恐れており、不吉なものかも知れないと思い決して見ないようにし、武器を集め、追い払う準備をしていた。

しかしカチナは歌と踊りで人々を清め、飢えている人に届けるための食料を与え、病を治す手助けをし、さらに干からびた作物に雨をもたらした。人々はカチナにとても感謝し、ホピの人々は彼らの部族の一部になれるように頼んだ。そしてカチナとホピの人々は何年もの間この村でとなり合って暮らしていた。

しかし時が経ち、人々は飢えることもなく生活できるようになり、徐々に怠慢になりカチナの生き方を軽視するようになった。畑には雑草が生い茂り、夫婦はふしだらになり、自分の面倒を見ることの出来ない老人達は忘れ去られ、子供は泣き叫んで汚れたまま放っておかれていた。そしてアドビ煉瓦の建物（注1）は崩壊し始めた。

カチナはホピとの生活の結果を見て、ホピの生き方を妨げたと感じ、去ることが最良の方法だと考えた。何が起ろうとしているかを悟った人々はカチナに留まるように説得したが、カチナは拒み、立ち去る前にカチナはどうやって捧げものを用意するか、儀式の服装、歌と踊り、どうやって自然を超えた力を身に付けるかを教えることに同意した。

儀式が正確に行われた時のみ真のスピリットは雨を運び、収穫をもたらし、あらゆる恵みを世界中の人に与えるため彼らの祈りをより高い神に届ける。これらの教えと共にカチナは自分達の住む聖なる山へ帰った。

カチナたちは冬から春にかけて雪と雨をもたらし、季節を巡らせるため6ヶ月間ホピの人々を訪れることを約束し、作物の成長と収穫を確実にするために種を発芽させる。

歌とダンスを伴うカチナセレモニー

カチナダンスはプエブロインディアンに共通する伝統的な儀式の1つで、ホピ族の他に近隣に住むズニ族や、ケレス語を扱うアコマ族、ラグナ族、サントドミンゴ族といった部族が同じ儀式を行っている。プエブロインディアンは半砂漠気候に住んでいるため、雨に頼って暮らしている。儀式が正確に行われた時、カチナは雨の恵みや作物の豊穣といった祝福を与える。このカチナダンスを伴う儀式は仮面を被りながら行うものと、仮面を被らずに行うものがある。冬至から夏至の間はカチナがホピの村にやってくるため、ホピの男性はカチナの仮面を被り、体には様々なペイントが描かれる。これは前述したカチナの言い伝えにあるように、カチナがホピ族の身を案じて、人間の姿になって人々の前に現れるといった「カチナの到来」を表している。この期間の儀式はカチナセレモニーと呼ばれる。

夏至になるとカチナはサンフランシスコピークスの山に帰るため、夏至から次の冬至までの間は人間の季節として、仮面を被らない儀礼を行う。こういった儀式は歌とカチナダンスを伴う、非常に重要な行いである。ホピ族の儀礼の目的は作物の豊穣や降雨であるため、儀式は作物の種撒き、発芽、成長、収穫といった農耕のサイクルに合わせて行われる。

しかしカチナ文化やカチナダンスは異教の侵入によって徐々に見られなくなっていった。1500年～1700年頃、仮面を被ったカチナ儀礼はテワで開催されていたが、現在はとても少なくなった。カチナ儀礼についての詳細は2章（2 - 1）で述べる。

アメリカ開拓史におけるキリスト教の侵食があったため、古来からのプエブロ文化は明確には理解できないことが、ホピ族を含め東プエブロ文化の研究において大きな障害となっている。

1－5　異教への改宗と伝統宗教の回帰

ホピ族の宗教はカチナ信仰である。ホピ族を含めネイテイブアメリカンは自然を敬い、共存して生きてきた。部族によって信仰する神は異なるが、共通して言えることは、大自然と共に生きていく為に、大地や太陽あらゆる自然の恵みに感謝し、儀式を通して母なる大地に祈りを捧げ、それぞれの伝統的な生き方を続けてきたということである。生き方に関する大きな違いは、農耕民族であるのか、狩猟民族であるのかといった点である。

プエブロインディアンは農耕民族で、定住型の生活している。農耕民族は狩猟民族より好戦的ではないため、部族の危険が脅かされる場合を除き、こちらから襲撃や略奪をすることは少ない。ホピもまた、平和という意味を持つ部族名であり、長い歴史の中で自らが略奪等の目的で攻撃をしかけたことはない。

ホピは旅人や客人を丁重にもてなすため、その後征服のためにやってきた外国人や狩猟民族による進出に対応が遅れた。特に16世紀のスペインのコンキスタドーレスの侵略は、ホピの文化の存続を脅かすことになった。

1540年ヌエバエスパーニャのスペイン副王は合州国南西部の征服のため、宣教師を連れて出発し、ホピの村のファーストメサ近くに到着した。（1 - 1）で述べたように、ホピ族には「白い兄弟」の言い伝えがある。ホピはスペイン人を伝説の白い兄弟の再来であると認識し歓迎した。しかし当時征服の目的は黄金や富であったために、ホピの大地にはそのようなものはもちろん無く、この探検は失敗であったと思えたが、ホピ族の地の植民地統治を目的に再びフランシスコ・バスケス・コロナドを送った。植民地統治は、「ホピの伝統文化を抑止し、儀礼や祭祀を禁止し、人々を強制的にカトリックに改宗させ、アンテロープ・メサにあった当時最大の村アワトヴィに、威容を誇る教会堂を建設させた。」[北沢2005年：198 - 199頁]とあるように、これまでの伝統的な生き方を阻止するものであり、人々を苦しめた。

このように15世紀に始まった北アメリカの征服は、ホピだけでなく多くのプエブロインディアンを苦しめ、銅と銀の豊富な鉱床を追い求め、その土地に住む先住民をキリスト教へ改宗させ、先住民の文化を破壊した。これによりたくさんの伝統的な村やネイティブの祭礼主義が壊され、かつて100あったプエブロの村が今日では25だけ残っている。こういったスペイン人との接触によりプエブロの文化が侵食されたため、プエブロのカチナ文化は十分に理解されていない。

またそれに加えて1670年代に、干ばつが地域を襲い、プエブロに飢饉がおこった。またヨーロッパから導入された病気により先住民の人口が減少した。「スペイン王朝やカトリック教会の神は頼りにならないと感じたプエブロ人たちは、もともとの古い神々への信仰に戻っていった。」[Adams 1991：p3]とあるように、1680年の「プエブロの大叛乱」が起こり、全プエブロが決起した。プエブロの大叛乱では、サン・ファン・プエブロの指導者ポペが侵略によって苦しむプエブロの意思の統一をはかった。ホピも武器を持って戦いに参加し、これにより全プエブロは主権を回復し、そしてプエブロの文化は蘇りつつあった。

しかし再び1692年にスペイン軍が襲撃した。これによりたくさんのプエブロの家が失われ、人々は殺された。スペイン軍はホピ族の集落にも攻めてきたが、第一メサにあるワルピの断崖に躊躇し、そして撤退していった。その後、キリスト教からの脱却と伝統的な宗教に回帰し、プエブロ文化独自のカチナ文化も復活した。

2章　カチナドールの変遷

ホピ族は精霊カチナを信仰しており、それを形状化したものがカチナドールである。精霊カチナが400柱以上存在するように、それを模したカチナドールも多くの種類がある。カチナドールはホ

ピ族の伝統工芸品の一つで、世界各国にカチナドールに魅了されたコレクターがいる。日本では水木しげるがその一人である。今日、カチナドールはアメリカはもちろん、日本の博物館・資料館等に保存されており、ホピ族の伝統文化の代表的な存在となっている。２章ではそのカチナドールとホピ族のあゆみを論述する。

２－１　儀礼と祭祀

ホピ族は農耕のサイクルに合わせてホピ族を含め全世界の為に儀式を行っている。儀式の名前は以下の通りである。

〈表１　１年間の儀式〉

〈カチナ到来〉	〈カチナ不在〉
12 月 冬至 SOYALA	7 月 NIMAN
1 月 PAMUYA	8 月 SNAKE or FLUTE
2 月 POWAMU	9 月 MARAU
3 月 ANKTIONI	10 月 OAQOLE
4 月 SOYOHIM	11 月 WUWUCHIM
5 月 SOYOHIM	
6 月 夏至	

ホピ族の儀式はひと月に１度、作物の豊穣や世界の平和のために儀式を行っている。儀式を行うのは主に男性であるが、世界のために儀式を行う存在になるためには、ホピ族の成人儀礼を通過しなければならない。これは前述した部族全体の儀礼とは別に個人を対象にして行われるものである。こういった儀礼は、こどもが誕生した時や親から離れる時、結婚する時、死んだ時などのライフイベントに付き行われるものである。身近な例を挙げるならば、日本で行われる成人式が挙げられる。ある程度の年齢に達したら子供と大人の区別をつける。このための儀式が成人式である。ホピ族の儀式の一つに、子供が４、５才を迎える頃の儀式がある。それはカチナ儀礼とよばれるものである。

ホピの子供は幼少時、宗教結社に加盟することになっている。宗教結社は蛇結社、カモシカ結社、青笛結社、龍舌蘭結社、ウウチム結社、灰色笛結社などがある。このうち最も高い地位にあるのが蛇結社で、８月の儀式、SNAKE DANCE で指揮をとる。

カチナ儀礼は、人によって結社が変わる。蛇結社が８月の儀式 SNAKEDANCE を行うような決まった結社が執り行うものではない。まずホピの子供が生まれると実母・実父とは別に儀礼母、儀礼父が必要とされる。儀礼父母は同じ宗教結社に属しており、生まれた子供の名前を考える。子供に兄弟がいたとしても、それぞれ別の儀礼父母が付き、結社は別々になる。

ホピ族の男性によると、子供の名前には動物と関連する意味があり、「高く飛ぶ鷲」や「速く走る馬」などが例にあげられる。ホピの方と名前について話し、子供の名前の由来に関してはそれぞれの生まれ育った環境や自分と社会との関係性が現れていると感じた。

儀礼父母が関与するのは子供が生まれた時の名付け時と、儀礼子が４・５歳に達した時に行われるカチナ儀礼である。カチナ儀礼を受けてから儀礼父母が所属する結社に加盟し、結社ごとに教育が行われる。教育内容はホピ族の生い立ちや、精霊カチナについてその神話や言い伝えを教えるものである。

その後子供が６歳から８歳になる頃、宗団に入ることになっている。宗団は２つのみで、ポワム宗団・カチナ宗団である。入団すると、それぞれ儀式が行われる。儀式はキバという地下室で厳密に行われる。ここでは大人が訓戒の役割であるカチナの格好を装い、子供たちに試練を与え、それに耐えるというものである。入団後は、１月の POWAMU 祭の期間にこどもたちにカチナから贈り物が与えられる。実際は宗団の大人たちがカチナの役を演じる。贈り物は、男の子にはモカシン（注 2）や弓を、女の子にはカチナドールを与える。こういった儀礼で使用されるカチナドールは tithu と呼ばれる。

カチナドールは、前述した子供の成長に合わせて行う儀礼以外の機会にも与えられることがある。子供が生まれた時にゆりかごに入れたり、「最初のカチナ tithu はホピの母性の観念を表したもので、新婚の証に花嫁に贈ることもある。」［Mcmanis 2000 年：6 頁］とあるように、この tithu は女の子だけでなく、大人の女性に配られる場合もある。

カチナの姿を装って行う儀式は男性が行うものであるため、儀式はカチナから直接男性に聖なるエネルギーをおくる。女性はそういった儀式に参加できないため、代わりにカチナドールを通して男性達が儀式で得たエネルギーを受け取り、間接的にカチナの恩恵を得ている。カチナドールはこのような儀式の一環として与えられ、ホピ族の子供の頃から認識されている。

２－２　アメリカ南西部の鉄道開通による伝統工芸品への影響

カチナドールは児童期の儀式において使用されているが、近代は儀式で使用されるものとは別に様々な装飾が施された商品としてのカチナドールが市場に出回っている。その大きなきっかけとなったのが、1880年頃のアメリカ南西部の鉄道の開通に伴う、観光産業の発展であった。このネイティブアメリカン以外の外部の人間との接触は、アメリカ南西部に住むホピ族や他のプエブロインディアンの伝統工芸品に影響を与えた。ホピ族を含めプエブロインディアンの伝統工芸品の一つにプエブロ土器がある。カチナドールが外部の目に触れ影響を受けたようにプエブロ土器も同じであった。飯山氏によると「1880年、南西部に鉄道が開通すると、東部から旅行客や物資が流入し大量生産の金物や陶製の器が土器に取って代わり始めた。自給自足の生活をしていた人々は、購買のために白人旅行客や交易商人に手持ちの土器を売り始め、プエブロ土器は始めて現金収入を得る商品となった。」とあり、1880年代には従来の生活物資である土器やカチナドールの価値が現金収入を得られる商品としての新しい価値が見出された。

商品化したカチナドール

プエブロの伝統工芸品が商品化を目的に制作されたことで、工芸品のデザインや色使い、形に変化がみられるようになった。儀礼において女の子に渡される当初のカチナドールは木製の板に顔や手の模様が描かれているだけのシンプルなデザインであった。（図２参照）こういった カチナドールを制作する権利は、ホピ族の宗教結社でカチナについての教育を受けた男性のみが持つ。女性には権利はない。それについては３章の「ホピ族の男女の役割について」にて論述する。

また、カチナドールの制作にはルールがある。制作者はカチナの教育を受けていることと、カチナドールに描かれる模様は、太陽や雨や雲を表すマークが使われていること。またコットンウッドの木を使用しているが、カチナドールを制作する際に木をつぎはぎせず、一本の木から最終的な形まで彫刻していく。カチナドールには様々なスタイルがあり、それを紹介するが、全てのカチナドールは基本的にはこの条件を満たしている。

２－３　カチナドールのスタイルの変遷

子供の成長儀礼にて使用される最初のカチナドールはトラディショナルスタイルと呼ぶ。また、子供の誕生時にゆりかごの中に入れることからクレイドルタイプとも呼ばれている。このスタイルを基にして、その後の時代の流れの中で発展し、新たなスタイルが生まれた。トラディショナルスタイルは数あるカチナドールのスタイルの中で最も伝統的でシンプルなデザインであると言えるが、制作者によって使用する色や柄の描き方にこだわりがあり、同じスタイルのカチナを制作したとしても弱冠の違いがある。基本的な特徴は人形と呼ぶよりは板にカチナの顔や手を描いただけのお守りのようなものであった。カチナドールが平らであるのは室内の壁に掛けるためである。

カチナドールの形状が大きく変化し始めたのは、ネイティブアメリカン以外の人々と接触した、1880年以降である。

本来平らであったカチナドールが立体的に制作されるようになった。胴体は全体とバランスのとれた太さになり、全体的に丸みをおびた形体に変化した。立体的に制作することによってカチナドールに重みが加わり、壁にかけるよりは足元に台座を設置し、置くという飾り方がふさわしくなった。これは南西部鉄道による物資の大量流入によって、これまで使用したことがなかった家具などの物質を知り、壁に飾るだけでなく机やタンスなどの物の上に置くといった機会が増えたからなのではないかと思われる。

またこれまで絵で表現され、彫刻はされていなかった腕や足が立体的に彫刻されるようになっ

た。この外部の文化を知りはじめた時代のカチナドールはフルフィギアと呼ばれる。図3がそれであるが、このカチナドールは道化師と呼ばれ、ホピの一般公開されているカチナセレモニーの中でも人気のある存在である。

道化師のダンサーはわざと様々な悪ふざけをして、滑稽な行動に笑いを誘われるが、道化師のダンサーの行動を見ることで、子供たちは教訓を得る。この道化師のカチナドールは精霊カチナを模したものではない。カチナセレモニーの時のダンサーであり、儀式の合間に登場する。道化師のカチナドールは他のカチナドールのように精霊カチナを形状化したものではなく、カチナダンサーそのものである。そのため、全体的に人間に似せて彫刻されている。道化師だけでなくフルフィギアのカチナドールはダンサーを模したものに近い。フルフィギアは体に手と足をつけた簡易なものから、髪飾りや服のしわ、髪の毛など細部にわたって表現したものが制作されるようになり、フルフィギアスタイルが生まれたことによって、これまでのカチナドールのスタイルが大きく変化した。

1880年以降のフルフィギアスタイルが多く市場に出回り、今日では博物館、資料館に展示されているが、本来のトラディショナルスタイルがなくなってしまったのではない。ホピ族が西部開拓の事業に関与したことで、カチナドールというものの在り方が変わったことは確かであるが、その後伝統的なスタイルである、トラディショナルスタイルのカチナドールがフルフィギアと別の形で変化した。それが、アーリートラディショナルスタイルである。トラディショナルスタイルのカチナドールは裏側が壁にかけられるように平らになっているが、この特徴を維持しながら胴体の表側に丸みを出し、壁にかけられるが半分立体的であるため、トラディショナルスタイルよりも存在感があるものへ変化した。図4は、そのアーリートラディショナルスタイルである。

このスタイルを更に加工したものが、ニュートラディショナルスタイルである。このカチナドールの製作者は、色塗りに使った絵の具は製作者自身がホピの居住地で採取した土や石を削って加工し、全て天然の素材を使っている。基本的な壁に掛けるといった特徴を継承しつつ、より華やか彫刻される。またカチナドールに動きがみられ、躍動感がある。ニュートラディショナルスタイルは、このスタイルの制作者が作りはじめたスタイルであるため、フルフィギアやトラディショナルスタイルの作品と比べると、制作の歴史は浅く、制作されている数はまだ少ない方である。また制作者自身のこだわりが作品に現れるようになり、製作者独自のデザインが加えられているので、カチナドールの容貌も個性的である。

1980年、ニュートラディショナルスタイルのカチナドールが制作され始めた頃、フルフィギアからも新たなスタイルが確立し始めた。ニューフルフィギアと、スカルプチャータイプである（図5参照）。スカルプチャータイプのスタイルはローブやマントを全身にまとったカチナドールであるため、カチナダンサーを模して作られた初期のフルフィギアに対して手脚の動きによる躍動感は控えめになり、動きとしては少しかがむような姿勢のものがみられる。スカルプチャータイプは精霊カチナの面影を残してはいるが、これまでのカチナドールのような原色を中心に描かれるものではなく、身体に彫刻される模様は、これまでの抽象的な雨や雲のマークを胴体にひときわ大きく描くことはなく、髪飾りなどの様々な装飾品や、細かく色鮮やかなデザインを使用している。また絵で模様を描くより、細かなデザインまで全て彫刻に頼っており、その上に色を塗るといった印象を感じた。

カチナドールの服に大きく派手な花の柄や鳥のデザインが描かれるようになるが、そのような花はホピの半砂漠気候である乾燥した大地に咲くようなものではないため、外部の地域のものである可能性がある。またホピの居住地には1900年代に学校教育が始まったため、その頃の子供たちからホピの外の文化を知ることが多くなったと思われる。

このようにスカルプチャスタイルの作品は、より芸術性の高い作品になっている。また自由な柄を描くことが許されるスタイルであり、ホピの伝承に登場する精霊カチナをそのまま形状化したものではなく、作者自身のオリジナルのカチナドールであるため、まったく同じような作品が生まれ

ることは少なく、完全なオリジナル作品として、制作者によって様々なカチナドールが制作されている。

ニューフルフィギアは、これまでのフルフィギアの特徴であった、カチナダンサーといった人間を模している他に、より細部まで彫刻がされるようになった。特にカチナダンサーの体の動きに合わせた服のしわや手の指の動き、関節まで細かく制作され、これまで頭部の装飾品で使われていた鳥の羽などは使用せず、全て彫刻で表現されている。またこれまで絵で表現されていた首飾りや腕輪、持ち物も全て彫刻で仕上げている。スカルプチャスタイルと同様に、彫刻のレベルが上がり、精霊カチナの形状化、あるいはカチナダンサーの形状化というよりは制作者個人の芸術作品としての作品といったものになっているように思われる。制作はとても細かい技術を必要とするが、これも前述した通り、全て１本の木から作られており、接木がされることはない。しかしこれまで制作に使われる木はコットンウッドであったが、作品の芸術性への追求から、制作者によっては別の木を使うこともある。

カチナドールは様々なスタイルの変遷を経て、進化し続けている。大きく分けて伝統的なカチナを模したスタイルと、芸術性を重視したスタイルといった２つの価値観があり、どれも木を継ぎ足したりすることはせず、一本の木から制作するというルールを守って発展してきた。トラディショナルスタイルから始まり、ニュートラディショナルスタイルとフルフィギアが生まれ、ニュートラディショナルスタイルからスカルプチャータイプ、フルフィギアからニューフルフィギアが登場した。

そのカチナドールのスタイルの変遷の背景の一つに、鉄道のネットワークが完成されたことによる観光産業の発展と、ホピ族の経済状況による就業状態と関わりがあった。１章１－３生活と信仰で述べたように、ホピ族は伝統的な自給自足の生活を営んでおり、現金収入を得る機会があまりないため、カチナドールを制作して商品を売ることは現金収入を得る貴重な手段と言える。ホピ族の中の進歩派と言える人々は特に、近代的な生活を送るためには現金収入はかかせない。カチナドールの変遷の背景にはアメリカ西部開拓に伴う観光産業の発展の他にも近代化した生活に適応するための手段であったりと、様々な理由が関係している。

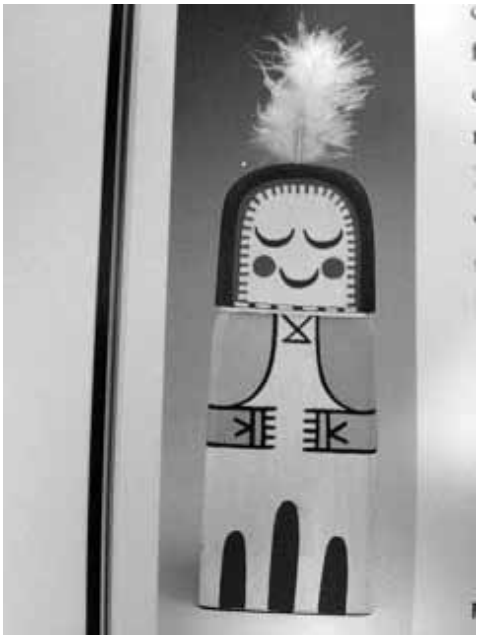

図２　トラディショナルスタイル

図３　フルフィギアスタイル

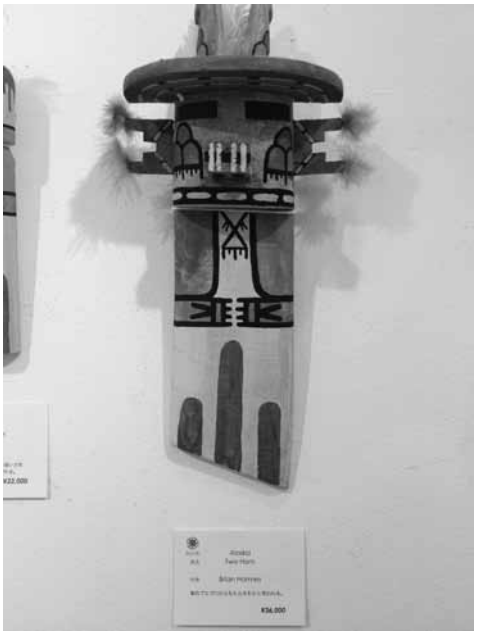

図４　ニュートラディショナルスタイル

図５　スカルプチャスタイル

３章　制作者の意識の変容

カチナドールが市場に出回って今なお多くの人々の目に触れているが、その制作の背景にはアメリカ西部開拓に伴う観光産業の発展の他にも、近代化した生活に適応するための手段といった理由があった。しかしこういった社会の動きに伴った作品の変化について、制作者自身の作品への想いはどうなっていったのか。またカチナドールはホピ族の信仰する精霊カチナやそれを儀式において歌と踊りで体現するカチナダンサーを模して作られたものであり、本来は神聖なものである。それを商品化するということは、信仰心に何らかの変化があったのか。そういった課題を追求するために、ホピ族の居住地に行き、現地調査を行った。そこでまずホピ族が日々従事している仕事の内容から、男女別の役割があり、また伝統工芸品の制作にあたっては宗教的な意味合いを持つことがわかった。

フィールドワークにあたって

2013 年の７月下旬から約 10 日間、アメリカのアリゾナ州に向かい、数日間ホピの居住地と、そこから車で２時間ほど離れた町に滞在した。滞在中はホピの方に付き添ってもらい、ホピの地の紹介とそれにまつわる伝承、伝統行事、現在の居住地問題など多くの貴重なお話を聞くことができた。またアリゾナ州の空港や町中、ホテル、パンフレットなど至るところにカチナドールやそれをモチーフにした壁掛け、ラグ、アクセサリー、グラスなどを見かけた。

１日目は夕方アメリカに到着して、まずセドナに宿泊した。セドナはネイテイブアメリカンの聖地と呼ばれる、アメリカ最大のパワースポットである。ここでは様々なネィティブアメリカンの部族の工芸品の店や、またパワーアイテムとして天然の水晶やドリーム・キャッチャーといった縁起物が販売されていた。セドナは大地の強いエネルギーを感じる場所で、ここで暮らす人々は穏やかに見える。町の風景はあたり一面、レッドロックと呼ばれる赤い岩肌がそびえたっている。ネイティブアメリカンの聖地として、大地と自然の偉大さを感じられずにはいられなかった。セドナではネイテイブアメリカンに倣って大地のエネルギーを感じるツアーや催しが開かれており、ここにいる人々は皆大自然を感じ、ゆっくりと流れる時間を楽しんでいるように思えた。そのためホピ

族の調査をするにあたって、セドナでの聞き取り調査は、ホピ居住地でなくても、ネイティブアメリカン以外の人も、古くからの伝統的な教えや知識を知っており、またそれに対して肯定的な考えを持つ人に会えたため、あらゆる視点で進めることができた。今回のフィールドワークでは、ホピ族以外の人々の意見も聞けたため、研究を進めるにあたって、現在のネイティブアメリカンの人々やその周囲の環境について、また伝統工芸品について、あらゆる問題を知ることになった。そうした現代を生きる人たちの意見をふまえて、フィールドワークの内容をまとめていきたい。

３－１　ホピ族における男女の役割

ホピ族の居住地に行くためには、車を使うしか方法はない。バスや電車などの公共交通機関はなく、車以外では現地ツアーを申し込み専用のトローリーで向かうことになる。ホピの現地ツアーは村周辺とカチナドールの店、文化センター等を周るものであるが、今回私はツアーを利用せず、ホピ族の知り合いの方と現地を視察した。

ホピ居留地には、ギャラリーが８か所ある。ここにはホピの伝統工芸品であるカチナドール、シルバージュエリー、バスケット、ポタリー、タイル、ラグなどを販売している。セカンドメサにあるホピ文化センターは居住地内のギャラリーの中で最も多くの工芸品を展示しており、他にもホピの歴史が紹介されている。

こういった伝統工芸品はホピの地で作られているが、全てのメサに共通して制作されているわけではない。例えばポタリーはファーストメサで作られている。実際にファーストメサのワルピ村で女性が制作しているところを見ることができた。ポタリーはその名の通り壺であるが、最近では壺の他に置物やスプーンを制作している。

ポタリーは女性が制作していたが、１章で記述したように、カチナドールに関しては男性のみが制作の権利がある。宗教結社に入り、カチナに関する教育を受けた者が初めて制作できる。その他のバスケットも作り手の性別が決まっているそうだ。また性別が関係するものとして儀式が挙げられる。これも男性が宗教結社に入ってから教育を受け厳格に行われる。儀式、仕事の他にも性別で区別されるものとして氏族制度がある。この３点をグラフにまとめた。

〈表２　男女別の仕事、家、儀式〉

	男性	女性
仕事	農耕,	
	カチナドール制作、 ジュエリー制作	ポタリー制作, バスケット制作 ジュエリー制作,
家	建築できる （継承は女性）	メサのプエブロの家 　所有 継承の権利あり
儀式	冬至～夏至の儀式, 夏至～冬至の儀式, 成人儀礼, 全て参加	冬至～夏至の儀式： 不参加 夏至～冬至の儀式： 参加 成人儀礼：参加

この男女別の調査から、ホピ族の社会では仕事、家、儀式においては男女の役割がはっきりしている。仕事について、ポタリー制作はワルピ村の女性が行っていたように、女性のみが制作する。ポタリーはその土地でとれた土を使って制作するが、『プエブロ社会における土器制作は古くから女性によって引き継がれてきた。それは粘土が母なる大地の一部であるため女性が扱うべきものであるという伝統に根ざしている。』［飯山 2011：21 頁］とあるように、大地から搾取した材料を扱う仕事を担うのは女性である。またプエブロの家は土や藁で塗り固めた日乾しレンガで作られているが、壁の塗装も女性が行う。

バスケットに関しても、女性が行う。コイル状に渦を巻いて制作し、幾何学模様や自然現象を編みこんでいく。メサによって制作方法が異なり、セカンドメサとサードメサの人々が得意である。

ジュエリーはバスケットやポタリー、カチナドールと比べてその歴史はまだ浅い。他の伝統工芸品とりわけカチナドールのような儀式で使用されるわけでもなく、ジュエリー制作に関しては宗教結社に入り教育を受けなくとも良い。しかし制作には専門的な知識がいるために、美術関係の学校に通わなければならないため、カチナドール制作よりも経済的に余裕がないとジュエリー制作者になるのは難しい。

工芸品の他に、ホピ族の主な生業として農耕がある。農耕は男性が行い、夫婦で仕事を分け合ったりせず、全て男性が行う。それについては、畑の土を掘り起こし、種を撒き、水を与えるなど、１つ１つの行為が宗教的で尊い行為であるからだと言われている。

ホピ族は伝統的な生業である農耕に合わせて年間の儀礼を行っている。儀礼と農耕が男性の役割であるということから、宗教的な行為に携わるのは男性である。またカチナドール制作も宗教結社に入り教育を受けてから制作の権利を得ることから、宗教的な行為であると言える。このようにホピ族の仕事、儀式、家の所有に関しては男女の役割がはっきりしている。女性は家、畑、キバの所有といった経済的な物の管理を行い、儀式・農耕といった宗教的な行為は男性の役割である。

３－２　制作者の暮らしと作品の傾向

３－１ではホピ族の社会を生きる男女の役割について述べた。宗教的な行為は男性が行うといった点について、カチナドール制作も宗教的な行為の１つであることが言える。

２章ではカチナドールが社会の動きに伴って現代まで様々な変遷を経てきたことを述べたが、フィールドワークではこのような社会の動向とは別に、各スタイルごとの制作者自身について聞き取り調査を行った（注3）。表２は、トラディショナルスタイル、ニュートラディショナルスタイル、スカルプチャスタイルの制作者の暮らし方をまとめたものである。

一番古いスタイルであるトラディショナルスタイルの作者を伝統派とし、最も新しいスタイルのスカルプチャスタイルをモダン派と呼ぶことにする。

トラディショナルスタイルの制作者はセカンドメサに住んでいる。暮らし方は、伝統的な農業で自給自足の生活を送っている。ホピのメサには渓谷があり、畑は水のたまりやすい場所につくられている。フィールドワークで行った時期はホピ・ティーと呼ばれるお茶の花が咲き、トウモロコシの青々とした葉が一面に広がっていた。制作者にとってカチナドール制作は行うが、それよりも農

〈表３　作品の傾向と制作者のライフスタイル〉

トラディショナル	ニュートラディショナル	スカルプチャ
〈　伝統派　〉	←→	〈　モダン派　〉
住　所	セカンドメサ	セカンドメサ　麓	ホピ郊外の町
生活圏	常にホピ在住	仕事　買い物：町へ ホピ在住	ホピ郊外　在住
仕　事	主に農耕 たまにドール制作 対象：観光客	農耕、 カチナドール 対象：バイヤー、観光客	主にカチナドール 対象：バイヤー，博物館，
技　法	簡素 トラディショナル スタイル 色：薄め	簡素　トラディショナルスタイル＋装飾品、柄は控えめ 色：薄め（天然絵の具）	華やかで多くの装飾品を用いる スカルプチャー タイプ 色：濃い目
値　段	おみやげで買える値段　50ドル～200ドル	高め 200～600ドル	かなり高い 200～800ドル

耕の方が大切な行事であるように感じた。店に展示してあるカチナドールの値段は様々であったが、偽物が安く出回っている中でのホピ族の本物の作品は非常に丁寧に作りこまれている（注4）。またトラディショナルスタイルの小ぶりで簡単なものは50ドルほどで売られていた。

ニュートラディショナルスタイルの作者は、メサのふもとに住んでいる。この方の家は電気と水道が通っており、ホピの村の中では進歩派寄りの生活を送っている。仕事はカチナドール制作と農耕の両方を行っている。ホピに在住しつつも、町の方へ買い物に行ったりと行動範囲は広い。制作したカチナドールは外国のバイヤーに売ったり、ホピのギャラリーに置いたりと、商品の販売に積極的である。制作に使用する塗料はホピの地で採取した土や石を細かく砕いたものや、草を濾してその汁を加工している。ニュートラディショナルスタイルは伝統的なスタイルの一部を継承しながらも、立体感のある作品であるが、制作者の生活スタイルもまた、伝統的な仕事をしつつも、電気、水道の使用といった近代的な生活も取りいれている。

最も新しい形であるスカルプチャスタイルは、一点物としての価値が大きい。伝統的なカチナドールというよりは、こだわった彫刻や細工が目立ち、芸術性を重視している。作品に使用される塗料は、町で鮮やかな色を探し購入する。スカルプチャスタイルの作者はホピ郊外の町で暮らしている。しかしながらカチナセレモニーの際はホピに一旦帰り、儀式に参加する。制作者の主な職業はカチナドール制作であり、日々作品の制作に時間をかけている。スカルプチャスタイルの作品は芸術性が高く、制作者の知名度によって値段が代わる。最近ではバイヤーによるインターネット上で通信販売が行われており、有名なアーティストは国外からも注文がくる。

それぞれの制作者の暮らしと作品の傾向を照らし合わせると、トラディショナルスタイルの制作者は伝統的な暮らし方を大切にしており、その中間のニュートラディショナルスタイルの作者に関しても、伝統を大切にしつつ、近代文化も取り入れるといったライフスタイルが作品に表れているように見える。スカルプチャスタイルの作品は、制作者の名前や部族名が記入されるようになるなど、儀式で子供たちに与えられるような、本来の共同体の物から個人の作品へと移行するといった価値の変化が伺える。しかしあくまでスカルプチャスタイルも、その容貌は個性的ではあるが精霊カチナを制作している。

このようにカチナドールの各スタイルの背景には、制作者のホピとしての生き方が見出せる。共通して言えることは、カチナドールの制作はやはり宗教的な行いであり、描かれる模様も雨や雷、霧、雲、トンボといった、水の恵みや、ウモロコシ、カボチャといった作物の豊作、太陽光線のシンボルなどの、ホピの大地に対する願いや先祖の思いなどである。制作者達はこういった柄を１つ１つ願いをこめて作品を手掛けている。

終章　おわりに

カチナドール制作はホピ族だけが行っているのではなく、近隣のズニ族とナバホ族も同様に制作を行っている。ホピ族とズニ族がカチナ信仰をもって制作する一方で、ナバホ族はカチナに対する信仰心はなく、ホピ族のカチナドールを真似て作ったものであるため、作品は簡素な作りで値段も安い。ナバホ族は狩猟民族で、自給自足のホピ族とは対照的に、これまで略奪や狩りで生活を営んできたため、他民族の文化もとりこんできた。カチナドールに関しても簡単に技を盗み、商品化して売り出している。ナバホ族のカチナドールを真似した人形は安価で観光客も手に入れやすいため、取扱店を多くみかけた。ナバホ族のカチナドールを真似た人形は、ホピ族のカチナドールの宣伝になっている。町中にあるインディアンジュエリーやラグの店に行った時、たまたま目に入った男性の肖像画を見ていた時、ホピの人は「それはナバホだ」と顔を曇らせた。こういった伝統工芸品をめぐる著作権問題がホピ族とナバホ族の仲に亀裂を生んでいる。

カチナドールの変遷は、3章で述べたように制作者の信仰心の薄れではなく、変遷の理由は大きくわけて3つあった。アメリカの鉄道開通による外部の文化や人との出会いと観光産業の発展、近代化に伴う制作者の生き方、近隣の部族による偽装作品がもたらすカチナドールの宣伝である。こ

ういったカチナドールの歴史は制作者の意識の変容が大きく関わっている。

カチナドールは様々なスタイルがあるが、その背景には伝統的または近代的な生活をおくる制作者の生き方が関係していると思われる。カチナドールの各スタイルは制作者のホピとしての生き方の表れである。どのスタイルの制作者もホピの伝統的な儀礼に参加し、宗教を重んじており、それはどのスタイルのカチナドールにも表れている。

「もしカチナドールが人形を意味するなら現在まで生き残らないだろう」[Adams 1991：6] とあるように、カチナドール制作がただの人形作りであるなら、かつてスペインが入植してネイティブの伝統的な祭礼を抑止した時、同時に滅びてしまうはずである。しかしカチナドールは現代まで生き残っている。作品としての姿は作り手により変わるが、ホピ族のカチナに対する信仰心や想いは形を変えながら現在まで引き継がれているのではないか。

注

(1) プエブロの家のこと。
(2) 動物の皮で製作された靴。
(3) 表3は主に製作している作品を例にあげたが、製作者は他のスタイルの作品も手がけている。
(4)「終章　終わりに」 参照。

参考文献

飯山千枝子「合衆国プエブロインディアンの土器制作―現代個人作家の伝統意識―」『社会学研究科年報』第18号，2011年，20頁.

伊藤敦規「アメリカ先住民美術工芸品の偽装問題　米国現行法と作家の認識を中心に」『立教アメリカンスタディーズ』第30号，2008年，98 - 99頁

伊藤敦規 『アメリカ南西部先住民の宝飾品』みんぱくゼミナール資料　2012年1月

伊藤敦規「循環する生と死―米国南西部先住民ホピの霊魂観―」加藤隆浩編『古代世界の霊魂観』勉誠出版，2009年，172-184頁

今福龍太「カチーナ、あるいはマージナルなものの権限」『Dressudy: 服飾研究』京都服飾大学研究財団，1982年，5-9頁

岡安ノリユキ『ホピ族のカチナドール展 2012』katsina garally 企画、2012, 10頁

小澤治郎『アメリカ鉄道業の展開』ミネルヴァ書房，1992年，7-43頁

鎌田遵『ネイティブ・アメリカン―先住民社会の現在』岩波新書，2009年，90-149頁

北澤方邦『蛇と太陽とコロンブス アメリカインディアンに学ぶ脱近代』農山漁村文化協会，1992年，16-146頁

北澤方邦 「ホピ　精緻な宇宙論系を持つ部族」『北米』第一部，2005年，196頁

北山耕平『輝く星 ホピ・インディアンの少年の物語』北山耕平訳，地湧社，2004年，283頁

近藤喜代『アメリカの鉄道史―SLが作った国』成山堂書店，2007年，105-114頁

佐々木高明「北米乾燥地域に於ける原始農耕生活―特にホピ族の場合―」人文地理学会編『人文地理』古今書院，1948年，29頁

高橋樹人「アメリカ先住民・ホピ族世界に捧げる平和の祈り」『週刊金曜日』金曜日，760号，2009年，7月，56-58頁

フランクウォーターズ『ホピ　宇宙からの聖書』林陽 訳，徳間書店，1993年，11頁

ポーラ・アンダーウッド『一万年の旅路　ネイティブアメリカンの口承史』星川淳訳，翔泳社，1998年，545頁

米山俊直他 訳『世界の民族と生活 4 北アメリカ』ぎょうせい発行　1980年，123-128頁

参考サイト

カチナドール専門店　ココペリ，カチナの歴史入手先〈http://kachina.studio-kokopelli.co.uk/〉(参照 2013-12-30)

インディアンライフ，インディアンと歴史入手先〈http://www.indeanakama.com/now/native.html〉(参照 2013-12-30)

図版出典

図1 プエブロインディアン居住地 160km/100mile
Echarles Adams,The origin and development of pueblo katsina cult,Arizona the university of Arizona press,1991,2-9.

図2 トラディショナルスタイル
Kent McManis,Hopi Katsina Dolls,Arizona:Rio

Nuevo Publishers,2000,6.
図３フルフィギアスタイル，図５スカルプチャスタイル
Barton Wright,HOPIKACHINAS:The Complete Guide to CollectingKachinadolls ,Fragstaff:Northland Publishing ,1997,8-143.
図４　ニュートラディショナルスタイル
ホピ族のカチナドール展　金子撮影